論文審査の結果の要旨

論文題名

「眺め」意識 −その心理療法における意義−

論文審査の要旨

本論文は、全８章 28 節から構成されている。

第１章 序論では、Neumann を引用しつつ、「意識」の機能を「分離し、はっきりさせる力」、「対立や区別をつくり出すことで世界体験を可能にさせる機能」とみなすことが一般的であることが示される。客観・論理性を重視する自然科学の発達もこの延長上にあり、その有効性の高さゆえに上記のような「意識」のあり方が唯一絶対視されがちであるという。このような「意識」のあり方に対して、著者は井筒俊彦の「眺め」という意識のあり方を対比なものとして取り上げる。この「眺め」意識は上記のような意識のあり方とは大きく異なるが、にもかかわらず、それは厳然と意識である点でユニークなものであるという。この「眺め」意識は心理臨床の場においても有益な視点をもたらす可能性をもっていると著者は考えるが、しかし、この概念は井筒の後期の著作の中でわずかに論じられただけで、その後展開されないままであったことが指摘される。本論は「眺め」意識の諸相を色々な資料から明らかにしていくこと、また、この「眺め」意識というものが心理療法の実践及び理論に関して本質的に有益であることを論じるものであることが表明される。

第２章「『眺め』意識とはなにか」の第１節では、Neumann の『意識の起源史』に沿って、まず、意識の本質的機能が「分離」と「明確化」であることが示される。Freud,S は精神分析の実践において「知る」ということを重要視したが、「知る」ためには「地」から「図」を「分離」する意識の働きが必要となる。この意識の機能の及ばない領域こそが、Freud,S のいう「無意識」であり、神経症の症状とは意識しがたい(「知る」ことができない)無意識内の内容物の影響により、自我のコントロールが奪われることである。それゆえ、精神分析における治療とは、意識が無意識を「知って」いくことにほかならない。この「意識」/「無意識」という対比的なこころの構造の提唱を画期的なものであるとみなしつつ、著者はここでの「意識」は単一化・明確化されてしまっているという。この点においては、「無意識」の概念が Freud,S のそれとは大きく異なる Jung,C,G においても変わりがないことが指摘されている。第２節「意識の基本形態としての『見る』意識」では、ルネサンス期以前においては聴覚が世界との接触をもたらす第一の感覚であるのに対して、ルネサンス期以降では「知る」という意識の機能が視覚(「見る」)によって最も直截的にもたらされることになることが指摘される。かような歴史的経緯と並行して、近代に登場した心理学の各分野ーたとえば、ゲシュタルト心理学における「図と地」、発達心理学における乳児の人の顔パターンへの注視、自閉症児に共同注視が乏しいことなどーでの研究においても「見る」ことこそが主体的な行為であり、意識の本質的側面であるとみなされていることが指摘される。このような「『見る』意識の独占」に対して第３節「『眺め』意識とは何か」では、白川静、折口信夫、井筒らの研究が参照され、「事物の『本質』的規定性を朦朧化することで、そこで現成する情趣空間の中に存在の深みを感得しようとする意識主体的態度」である「眺め」意識が提示される。この「眺め」意識という概念を精微化すべく、第４節「観の目と『眺め』意識」では生死を分ける剣法での立ち会いにおいて重要となる「観の目(直感的に対象化できない全体的な情報をつかむ方法)」と「見

の目」が対比的に検討され、また、第５節「あきらめと『眺め』意識」では、著者が行った実験心理学的調査から得られたデータをふまえて、語源的に「明らかにして見る、心を晴らす」である「あきらめ」という言葉が必ずしもネガティブな意味だけではなく、「受容・許し」といったポジティブな側面が(とくに心理臨床実践では)あることが論じられ、「眺め」意識に連なるものであることが論じられている。

第３章「和歌の中の『眺め』」では、井筒が提唱した「眺め」意識が新古今和歌集に由来し着想されたものであることから、和歌の文脈から「眺め」意識が検討される。第１節ではその題(「古今和歌集から新古今和歌集に至る『眺め』)にあるように、前者から後者への時間的推移の中での「眺め」という概念の変遷が検討されている。折口が指摘するように、前者においては「眺め」は「春の長雨期の男女間の淡い性的気分でのもの思い」を表していたのが、後者になると男女間の気分やさらには何かを具体的に志向する方向さえも消えて、すぐれて感覚的・抽象的な態度の表現となる。さらに前者を遡って、万葉集の時代では「見る」という言葉は「相手に働きかけ、融け合おうとする」霊的交渉のニュアンスがあったと指摘する白川の説を検証しながら、著者は「古来の意味における『見る』の衰退と『眺め』の出現が関係している」という若松の論考に賛同する。第２節「『眺め』と『あくがれ』」では、「憧れる」の古語である「あくがれ」が「魂が肉体から離れ抜け出すこと」や「何かに心奪われてぼんやりすること」を意味していたことが指摘し、新古今和歌集を参照しつつ、「あくがれ」を導く方法こそが「眺め」であることが提示される。ついで第３節では、「眺め」が未来や彼岸など＜あちら＞の世界を想像して歌っていることが指摘され、それが眼前の対象ではなく、その背景(井筒の用語で言えば「花が存在するのではない。存在が花する」の＜存在＞)へ焦点をあてる意識的態度であること、さらには、＜あちら＞(存在)に何がいるかを明らかにする方向よりも、そこに焦点をあてることで浮かび上がる情趣の方を重視する態度であることが論じられている。

第４章(「石と『眺め』」)以降は、既述してきた「眺め」意識の井筒による定義を、臨床事例(たとえば、ある統合失調症患者が何の変哲もない石を大切にしており、それを眺めることが治療的意味をもっていた事例)に照らすことで、深化拡大することが試みられる。第１節「日本人にとっての石」では、日本人のもっともプリミティブな信仰の対象が石であった(折口)こと、しかも、その信仰はたとえば、丸石神のように、それが「表象のゼロ度」的に「なにも意味しない」ことが重要な側面となっている(中沢)ことが論じられ、ついで第 4 節(置かれた石と『眺め』意識)では、竜安寺などの石庭に配置された石が「無」自性、すなわち、象徴学的に解釈するのではなく、「黙って眺める」ものであることが論じられる。さらには、赤瀬川の提唱する「超芸術」の視点を援用し、街中に置かれている石に分析的な態度を拒むものとしての＜意味の不問性＞を見いだす。続く第３節では、村上春樹の短編小説、『日々移動する腎臓のかたちをした石』を素材にし、その解釈から石が、地上/地下、日常/異界、生者/死者、意識/無意識といった境界を越え出て行く「越境する存在」であることを抽出する。すなわち、石は本質に規定される前の「存在そのもの」の側面をもつものであり、このような側面に対しては「眺め」る意識がふさわしいものとなる、と。

第５章では、臨床事例として強迫神経症(手を何度も洗浄する、火の後始末の確認の繰り返し)の男性が取り上げられる。一般的にも当てはまるが、本事例の強迫症者は偶然や意識できないものを恐れ、すべてを意識のコントロール下に置こうとし、自身の症状に対しても「意識性を高める」方略をとるのだが、結果、悪循環的に強迫のループに取り込まれているという見立てがなされる。本事例の患者は心理療法の進展と共に症状が軽快していくのだが、経過や語られた夢の中で徐々に「見る」という(男性的な)意識から、「眺め」る

という(女性的な)意識に変容していく様が示されており、その意味・意義が「女性的意識」(河合)や「共視」論(北山)などを援用しながら詳細に論じられている。

第６章でも箱庭療法を中心とした中年期の女性患者の臨床事例が取り上げられている。この患者の主訴や経過の中での語り、作成された箱庭の流れから著者は「人生の折り返し地点である」中年期の課題を見立てる。この章では個々の箱庭に関して精微な分析がなされているが、とくに特徴的なものを３つとりあげる。ひとつは、経過の中間期に作成された「(箱底の水色の部分を水に見立てた)池に映る月」という箱庭作品を電灯を消して二人で「眺め」たという回である。太陽が男性的で上昇原理を象徴するとすれば、月は女性的な下降原理を象徴するものであり、また満ち欠けするものである月は「死」をも含む＜あちらの世界＞の表象でもあると著者はいう。このような月を「見る」意識で分析的に把握するのではなく、「眺め」ることで詩的に観取することに治療的意味があったことが論じられる。また、最終回の一つ前の回で作成された箱庭では、此岸と彼岸が作られ、彼岸にはマリア像が置かれ、両岸を船が行き来するように置かれるのだが、最終回では患者は前回の箱庭を「なぜか作りたくないのだけれど作ってしまった」と語り、新たに彼岸に一輪の青い花だけが置かれた箱庭を製作した。「川は三途の川。(前回のに比して)こちらが好き。腑に落ちます。あちら(彼岸)に行くのが楽しみな感じ」と語る。この青い花は第４章で検討された石の＜意味の不問性＞に通じるものであり、著者はここに、死を含む人生後半期に対して、そこに何があるのかを「見る」意識が強すぎことが逆に困難さを生じさせていた患者がだんだんと「眺め」意識に親和的になり、何があるかわからないが何かが「ある」という、本質を明らかにしない、かつ詩的情緒を伴う観点をもつことで自身の人生後半(そこに死が含まれる)を納得して受け入れていったことが考察されている。

第４章までの論究を踏まえ、第 5, 6 章で取り上げた事例の考察を心理療法一般に普遍化しようとするのが、第７章「心理療法における『眺め』意識」である。ここでは、心理療法の中でしばしば現れるイメージであり、また心理療法の根本モデルともいえる「渡河」のテーマが取り上げられ、渡った先に何があるのかをはっきりと「見る」意識にこだわるのではなく、それを「眺め」るという意識への変化が治療的意義をもつことが理論的に提示される。また、「眺め」意識のもつ心理臨床的意義を Jung,C,G の「補償」と対比させつつ吟味することで、治療者もまた「眺め」意識をもつことの治療的意義、治療者と患者が「共視」的に一緒に「眺め」ることの重要性など、「眺め」意識に固有な特徴を浮き彫りにしている。

さらには、ギリシア神話において「先を知る者」を意味するプロメテウスとその弟である「後になって知る者」を意味するエピメテウスが対比的に取り上げられる。心理療法の中で生じる「転移ー逆転移」現象は心理療法の実践の中で困難な様相をもつものであるが、これに関してプロメテウスのように「はっきり見て知る」という態度を取るのではなく、治療者がその渦中に巻き込まれ、患者と情緒を感染させ合いながらオロオロし、その状況を「眺め」、状況が治療的に展開し終わった「後で」何が生じていたかを「知る」というエピメテウス的な態度が有益であり、この点も「眺め」意識のもつ重要な側面であることが論じられ、第８章の「結論」に至っている。

Freud,S が創設した精神分析においても、あるいはその後さまざまな支流に分かれた各学派においても、深層心理学派においては理論的には「無意識」という概念が中核的なものであり、治療実践面ではその「意識化」が重要視されている点ではほぼ共通している。このような「無意識」の「意識化」を重視する視点に

対して、本論文は「眺め」意識という「クリアな意識化」とは異なる意識のあり方の心理療法的な有用性を論じるものである点で非常にユニークな視点に立っている。このような視点は、たとえば河合隼雄の「女性像としての自我」「女性的な意識」という概念の中にも見いだされるが、その後あまり発展されていない。また、本論文の中核となっている「眺め」意識は井筒俊彦由来の概念であるが、この概念も未だ十全にその可能性を展開させられていない観がある。その意味で、本論文はこれらの概念を心理臨床実践の文脈から捉え直して発展させたものだとも言え、その成果はたいへん貴重なものであると評価される。なにより、本論文では「眺め」意識に関する細密な理論的検討に加えて、心理療法の実践の上で有益となる方法論的態度が説得力をもって提唱されていることが非常に有意義である。

一方、審査の中では、提示された事例の解釈をもっと「眺め」意識の視点そのものから掘り下げられるのではないかという意見や、治療者自身が「眺め」意識をもつことの意義・効果をさらに理論的に考察していけるのではないかということなどが今後の課題として指摘された。しかし、これらは、本論文の内容が今後さらに発展させうる大きな可能性を内包させているがゆえの指摘であり、本論文の価値を減じるものではなく、本論文が「博士(臨床心理学)」の学位を授与するにふさわしいものであることを審査員全員一致で承認した。

論文審査主査　　川嵜　克哲　教授

吉川　眞理　教授

森岡　正芳　特別非常勤講師

（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）